



エーミールと探偵たち

エーリヒ・ケストナー作 高橋健二訳

W・トリヤー絵

岩波書店 1962年(ドイツ1928)

エーミールはおばあさんの家に行く汽車の中で、大切なお金を盗まれてしまいます。犯人は向かいの座席の山高帽の男。汽車を降り犯人を追うエーミールは、途中で出会った都会っ子たちと作戦をたて、追跡を始めました。ナチス政権に反抗しながら詩や小説を書き続けたケストナーは、編集者に子どものための本を書くことをすすめられます。「子どものときに養った心を、大人になっても持ち続けてもらいたい」ケストナーの作品にはすべてこの願いがこめられています。「飛ぶ教室」「ふたりのロッテ」などの名作をふくむ、ケストナー少年文学全集の最初の作品です。



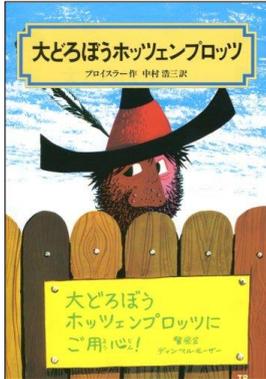
大きな森の小さな家

ローラ・インガルス・ワイルダー作

恩地三保子訳 ガース・ウィリアムズ画

福音館書店 1972年(アメリカ1932)

開拓時代のアメリカ。大きな森の小さな家で両親と3人の娘が暮らしています。自然の脅威から家族を守り、必要な物をなんでも手作りでできる両親は、頼もしいだけではありません。父さんはヴァイオリンを弾いて歌い、母さんは生活を彩ることを楽しみます。5歳だった次女ローラの記憶から再現された家族の1年間は季節感にあふれ、日々のこまごました営みのなんと豊かで魅力的なことでしょう。映像化もされましたが文章はもっと楽しめます。「大草原の小さな家」「プラム・クリーク」などと続く「インガルス一家の物語」の第1巻です。

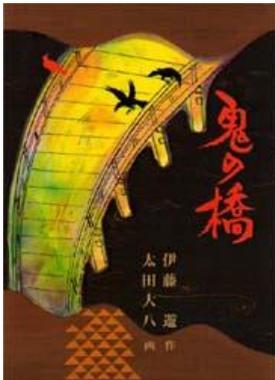


大どろぼうホッツェンプロッツ

オトフリート・プロイスラー作 中村浩三訳
トリップ画

偕成社 1966年(ドイツ1962)

おばあさんのコーヒーひきを盗んだ大どろぼうホッツェンプロッツを追って、二人の少年の冒険が始まります。大どろぼうのわなにかかり魔法使いに売りとばされても、勇気と知恵で大活躍する少年たち。テンポよく進むお話の面白さ、憎みきれないユーモラスな悪党たち。いつの間にか読者は物語の中にぐんぐん引き込まれていきます。妖精や魔術のふしぎな世界と少年たちの奇抜な冒険が一つになったスリルとユーモアたっぷりの物語です。続編に「大どろぼうホッツェンプロッツふたびあらわる」「大どろぼうホッツェンプロッツ三たびあらわる」があります。

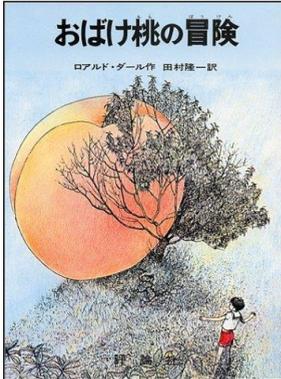


鬼の橋

伊藤 遊作 太田大八画

福音館書店 1998年

舞台は平安時代、異界との境界といわれた京の五条橋と六道の辻あたり。愛する異母妹を死なせ、自責の念と空ろな心をもてあます貴族の少年たかめらは、廃寺の古井戸から冥界に迷い込みます。戻ってきた現世での、橋の下の孤児、勝気な阿子那や、冥界からきた鬼との衝撃的な出会い。全く境遇の違う彼らと真剣に関わりながら、少年が立ち直り成長していく物語。実在の小野篁の伝説が下敷きになった、読み応えのあるファンタジー作品です。



おばけ桃の冒険

ロアルド・ダール作 田村隆一訳

N・E・バーカート絵

評論社 1976年(アメリカ1961)

とてつもなく意地悪な二人のおばさんと暮らしているジェームスは、毎日が辛く孤独です。ある日、突然、桃の木に小さな家ほどの実がなります。ジェームスが中に入ってみると、巨大で不気味な昆虫たちが待ちかまえていたのです。桃は枝から離れ、おばさんたちをペチャンコに押しつぶし、転げ落ちて海に浮かび、空を飛び、大西洋を越え…。荒唐無稽な出来事とともに、ジェームスが解放され自由になってゆく様子が、小気味よく痛快です。



影との戦い ゲド戦記 I

ル・グウィン作 清水真砂子訳

岩波書店 1976年(アメリカ1968)

魔法使い修行中のゲドは、若さゆえのおごりから死の世界の影を呼び出してしまいます。瀕死の重症を負ったゲドは、その後も影に追われ、おびえながら逃避行を続けます。しかし、師の言葉で、ゲドは影と正面から向き合う決意を固めます。過ちを経て、魔法使いとして成長するゲドが、いつしか読んでいた自分と重なり、生きる力が湧いてくるファンタジーの傑作です。魔法使いと竜が、美しい島々と海を舞台にして繰り広げるこのシリーズは「こわれた腕輪」「さいはての島へ」「帰還」「アースシーの風」の全5巻です。



風にのってきた メアリー・ポピンズ

P・L・トラヴァース作 林 容吉訳

メアリー・シェパード絵

岩波書店 1963年(作 1934)

バンクス家では4人の子どもの世話をしてくれる人を探していました。そこへ、東風とともに現れたのがメアリー・ポピンズです。空っほのかばんから次々と品物が出てきたり、空中に浮かんでお茶を飲んだり、子どもたちは、メアリー・ポピンズと一緒に不思議でわくわくすることばかり。けれど、春になって風が西に変わると…。メアリー・ポピンズの不思議な力だけでなく、毅然とした態度やプライドの高さ、ふと見せる温かさが魅力的です。他に「帰ってきたメアリー・ポピンズ」など続編があります。



がんばれヘンリーくん

ベバリオ・クリアー作 松岡享子訳

ダーリング絵

学習研究社 1968年(アメリカ 1950)

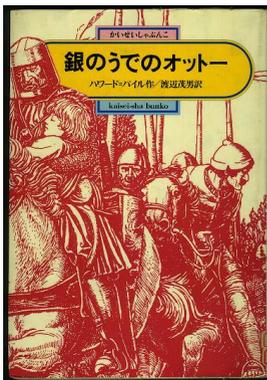
ヘンリーくんは、ある日、町でおなかをすかせた犬と出会います。あばら骨がすけてみえるほどやせていたので、アバラーと名付けてその犬を飼うことにしましたが、それ以来、ヘンリーくんの生活には次々と面白い出来事が…。アバラーとの生活を描いた6つのエピソードは、どれにも思いがけない愉快な展開と、満足のいく結末が用意され、ヘンリーくんを見守る大人たちも魅力的です。ヘンリーくんの他、アバラーや友達の妹ラモーナを主人公にして続く続編は十数冊におよび、どれも古き良き時代のアメリカらしい明るさにあふれています。



霧のむこうのふしぎな町

柏葉幸子作 竹川功三郎絵
講談社 1975年

夏休みを、一人、霧の谷で過ごすことにしたリナが、ピエロの傘に導かれて着いたのは、森の中のふしぎな町でした。そこには赤や黄色の洋館がら軒並び、魔法使いの子孫という住人たちが一風変わった店を開いていました。「働かざる者食うべからず」という宿のおばあさんの方針のもと、リナは早速それらの店へ手伝いに行かされますが…。そんなふしぎな町で、リナが戸惑いながらも、楽しく過ごし、ちょっぴり成長して帰ってくる物語です。



銀のうでのオットー

ハワード=パイル作 渡辺茂男訳
偕成社 1983年
(偕成社文庫)

「竜の館」の残忍な城主の息子として、母の死と引替えに生まれたオットーは、僧院に預けられ、穏やかに育ちます。12歳の時、館につれ戻されますが、城主の宿敵にとらえられ、片腕を失います。舞台は暗黒の時代といわれる中世ドイツの残酷で無法な豪族社会。過酷な運命に弄ばれながらも清らかな魂を失わず、「銀のうでのオットー」として、人々に愛され尊敬されるようになった少年の波瀾に満ちた物語。作者自身の挿絵も魅力的です。

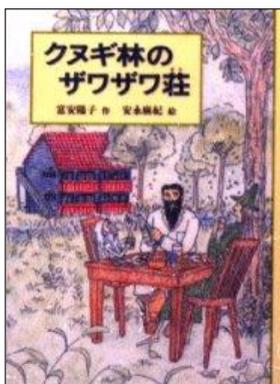


くしゃみくしゃみ天のめぐみ

松岡享子作

福音館書店 1968年

「くしゃみのおっかあ」のくしゃみはでっかくて牛や馬をも吹き飛ばすほど。ある日、息子のはくしょんは、おっかあのくしゃみに飛ばされて、てんぐ山のむこうの長者の屋敷に落ちこちます。はくしょんがくしゃみのおかげで幸せになるという表題作の他、梅の香のおならをする「梅の木村のおならじいさん」や、大食らいで、お腹の中に雀の大群が住みつく「あくびあや太郎」の話など、奇想天外で愉快なお話が5つ入っています。

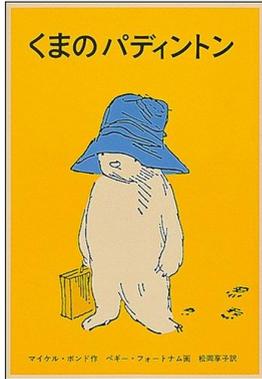


クヌギ林のザワザワ荘

富安陽子作 安永摩紀絵

あかね書房 1990年

アパートを追い出された科学者の矢鳴先生が猫股不動産で紹介されたのは「お神楽山南、竜ヶ滝上流、クヌギ林内」のザワザワ荘。住人は、人の魂を集めているアズキトギ、水の中から追い出された水の精、化けキツネを目指す親子のキツネと、みな妖怪です。酒を酌み交わし語り合ううちに、矢鳴先生は不思議な住人たちとすっかり友だちになります。私たちの暮らしは、昔から自然や妖怪などと深く関わっていたことを思い出させてくれます。



くまのパディントン

マイケル・ボンド作 松岡享子訳

ペギー・フォートナム画

福音館書店 1967年(作) 1958)

ロンドンの駅で小さな茶色いくまを見つけたブラウン夫妻は、駅名をとって「パディントン」と名をつけ家族に迎えます。トレードマークは奇妙な帽子と古いかばん。大好物はママレード。ペルーから密航してきたというパディントンにとって、イギリスでの生活は珍しいことばかり。初めて入ったお風呂ではお湯をあふれさせて…。大真面目なのに失敗ばかりのパディントンとそれに関わる人々の様子が暖かく、ユーモラスに描かれています。他に「パディントンとクリスマス」など6冊があります。



くらやみ城の冒険

ミス・ピアンカ シリーズ 1

マージェリー・シャープ作 渡辺茂男訳

ガース・ウィリアムズ絵

岩波書店 1987年(作) 1959)

恐ろしいくらやみ城にノルウェーの詩人が囚われていました。囚人友の会のねずみたちはこの詩人の救出を計画します。助けに行くのは優雅な白ねずみミス・ピアンカ、ノルウェーからやってきた船乗りねずみ、彼女に思いを寄せる純朴な台所ねずみ。三匹は知恵と勇気をふるって数々の困難を乗り越えていきます。そしてミス・ピアンカと台所ねずみのほのかな恋の行方は…。ミス・ピアンカとその仲間の機知に富んだやりとりが絶妙です。他に「ダイヤの館の冒険」など6冊があります。



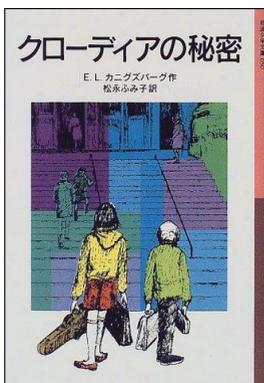
グリーン・ノウの子どもたち

ルーシー・M・ポストン作 亀井俊介訳

ピーター・ポストン絵

評論社 1972年（作年1954）

母を亡くしたトーリー少年は、大おばあさんの住むグリーン・ノウの館で休暇を過ごすためにやって来ました。古い石造りの館には不思議なことがいっぱいです。姿の見えない子ども達のひそひそ声や笑い声、ゆうれい馬や呪いのかかった植木など。大おばあさんの昔話を聞き馴染んでいくうち、ついにトーリーは三百年前にこの館に住んでいた子ども達と会うことができます。舞台となったこの館は今も英国に在り、私達を物語の中へ誘います。カーネギー賞を受賞した「グリーン・ノウのお客さま」を含め全5巻と別巻があります。

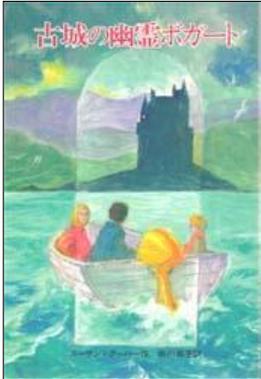


クローディアの秘密

E・L・カニグズバーグ作 松永ふみ子訳

岩波書店 1969年（作年1967）

綿密な計画をたてて、少女クローディアは家出を決行します。弟のジェイミーを誘い、行き先はニューヨークのメトロポリタン美術館。楽器ケースに下着を詰め込み、警備の目をくぐりぬけ、展示品のベッドで優雅に眠り、レストランの噴水で入浴。そんな中、ふたりは美術館の「掘りだしもの」に関心を抱きはじめます。その天使の像は果たしてミケランジェロの作なのか。そして、この謎解きと共に快適？な家出も意外な結末を迎えるのです。



古城の幽霊ボガート

スーザン・クーパー作 掛川恭子訳
岩波書店 1999年(原刊1993)

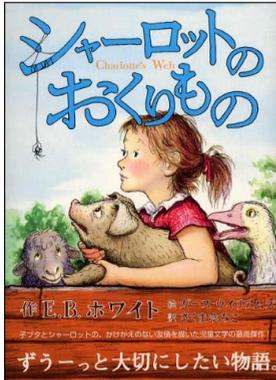
妖精ボガートは何百年も前から、スコットランドの湖に浮かぶ小さな古城に住み着き、いたずらを楽しんできました。ところがある日、城を相続した一家が住むカナダの都会トロントに来てしまいます。一家の姉弟はホームシックにかかったボガートをコンピュータを使って懐かしい故郷へ帰そうと苦労します。その方法の何と斬新なことか。伝統が息づく静かなスコットランドとボガートの存在を知る人のいない現代的なトロントとの対比が鮮やかです。続編に「ネス湖の怪獣とボガート」があります。



しずく的首飾り

ジョーン・エイキン作 猪熊葉子訳
ヤン・ピアンコフスキー絵
岩波書店 1975年(原刊1968)

ヒイラギの木にひっかかって叫んでいる男をジョーンズさんが助けてみると、それは北風でした。北風は、生れたばかりのローラのために光る雨つぶが三粒ついた「しずく的首飾り」をくれました。そして誕生日のたびに、不思議な力がある雨つぶをふやしてくれると言うのです。生活感のある現実と空想の世界を行き来しながら、笑ったり、しみじみしたり、ほっとしたり。八つの短編が、沢山の影絵や色彩豊かな挿絵画と共に楽しめます。



シャーロットのおくりもの

E・B・ホワイト作 さくまゆみこ訳
ガース・ウィリアムズ絵
あすなろ書房 2001年(アメリカ1952)
〈法政大学出版局 1973年〉

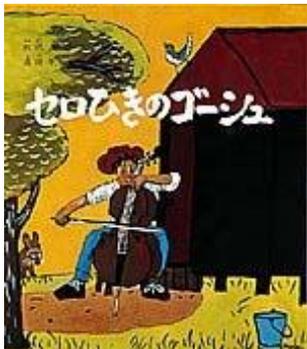
農場で暮らす子豚のウィルバーが、ひとりぼっちで寂しがっていると、クモのシャーロットが友だちになってくれます。豚はいずれ殺される運命と知り、悲しんでいると、助ける約束もしてくれます。クモが身体を張って、ひそかに用意してくれた贈り物のおかげで、子豚は命びろいをしますが、クモ自身は秋になると…。深い友情の美しさを、美しいだけで終わらせず、自然界の生と死の営みの厳しさも、きちんと伝えていて、心に残ります。



精霊の守り人

上橋菜穂子作 二木真希子絵
偕成社 1996年

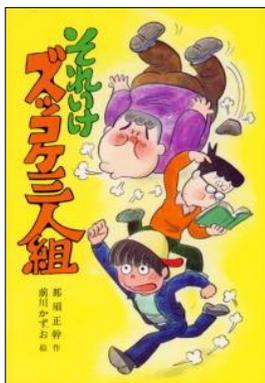
女用心棒バルサが偶然助けた少年は、精霊の卵を宿した精霊の守り人、新ヨゴ皇国の皇子チャグムでした。チャグムを襲う影と、彼を守ろうとするバルサの息づまる死闘が始まります。一方では、人の世界と、精霊の住むもう一つの世界の伝説に隠された秘密を探る、星読博士や呪術師たちの動き。望みもしない運命に翻弄されながらも必死に生き抜くために闘いつづけるバルサの強さと、彼女に守られ成長していくチャグムの姿が感動的です。「闇の守り人」「夢の守り人」と続く本格的ファンタジー「守り人シリーズ」の第一巻です。



セロひきのゴーシュ

宮沢賢治作 茂田井武画
福音館書店 1966年

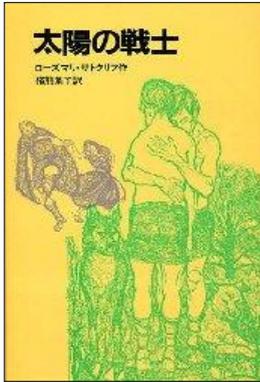
金星音楽団でセロを弾くゴーシュは、仲間の楽手の中では一番下手で、楽長に叱られてばかりいました。演奏会を十日後に控えた晩、ゴーシュが家で猛練習を始めると、生意気な猫が現われます。次の晩はかっこうがドレミファを習いに、その次の晩は狸の子が来て…。動物たちと夜を過ごすうち、いつしかゴーシュのセロは上達していきます。そして演奏会の日…。素朴で不思議な物語の雰囲気伝える挿絵と一緒に楽しんで欲しい一冊です。



それいけズッコケ三人組

那須正幹作 前川かずお絵
ポプラ社 1976年

チビでせっかちなハチベエ、太ってのんびり屋のモーちゃん、眼鏡をかけた物知りのハカセ。3人は花山第二小学校6年1組の仲良しトリオです。強盗が入ったり、幽霊が出たり事件が起こるたびに、3人はそれぞれの個性を発揮して大活躍！シリーズ各巻では、占い、お化け、ミステリーなど子どもたちの好きな題材を取り上げていて、読み出したら止まらないおもしろさ。子どもの本音がばっちりの、戦後一番読まれているシリーズです。現在46巻出版されています。



太陽の戦士

ローズマリ・サトクリフ作 猪熊葉子訳
 チャールズ・キーピング絵
 岩波書店 1968年(仔) 1958)

青銅時代のブリテン。片腕の不自由な少年ドレムは、部族の中で自分の場を獲得するために、戦士をめざして槍の修練に励んでいました。しかし、最後の試練であるオオカミ殺しに失敗し…。氏族社会の厳しい掟の中で、肉体的障害を克服して、生きる道を見出していくドレムを通し、作者は、時代を超えて共通する成長期の若者の姿を描き出します。青銅時代を再現するかのような生きいきとした情景描写と、生命を慈しむ作者の眼差しも、作品の大きな魅力です。他に、ローマ時代のブリテンを舞台にした「ともしびをかかげて」を含む三部作も是非読んで欲しい作品です。



タチ はろかなるモンゴルをめざして

ジェームズ・オールドリッジ作 中村妙子訳
 評論社 1977年(仔) 1974)

蒙古野馬のタチは、^{ボニー}小馬ピーブを道連れにイギリスの動物保護地から脱走します。故郷からも仲間からも遠ざけられた野馬の本能と誇りは、奇少種の保護という人間側の思惑をはるかに越えていたのです。各地から寄せられる目撃情報がモンゴルの少年とイギリスの少女の文通によってつながります。そこには故郷モンゴルをめざして、ひたすら前に進む二頭の姿が浮かび上がってくるのです。馬たちが残した強烈な印象。心揺さぶる動物物語です。

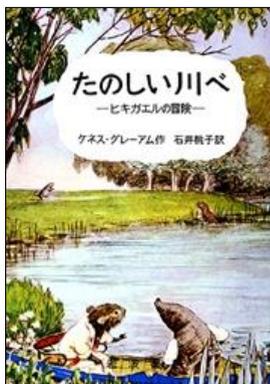


龍の子太郎

松谷みよ子作

講談社 1960年

山あいの貧しい村で、ばあさまに育てられた龍の子太郎は、龍になって北の湖に住むという母を訪ねて旅に出ます。天狗さまから百人力を授かり、心やさしい少女あやの助けを得てようやく湖にたどり着いた時、太郎が知った、母が龍になったわけとは…。そしてその時、太郎が抱いた願いとは…。旅での経験を通して、いつしか貧しい村人たちを思いやるまでに成長した太郎が、龍の姿の母の背にのって山を切り開いて迎える結末は感動的です。



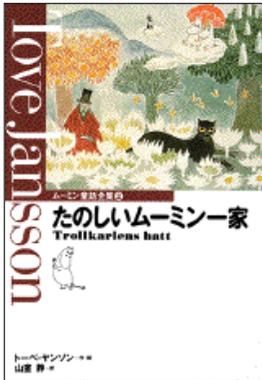
たのしい川べ ヒキガエルの冒険

ケネス・グレアム作 石井桃子訳

E・H・シェパード画

岩波書店 1963年(貸 1908)

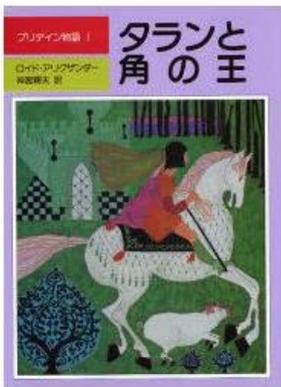
春、モグラは長い間の地下の生活から光あふれる地上へとび出し、川べに住むネズミと仲良くなりました。モグラはボート遊びの楽しさを知り、アナグマやヒキガエルとも友だちになります。気はいいけれど自慢屋のヒキガエルが次々と巻き起こす事件。その解決のために力を尽くす3匹。個性をもった動物たちが、イギリスの四季や自然を背景に生きいきと描かれ、一世紀近くも前の作品とは思えない新鮮さがあります。挿絵も魅力的です。



たのしいムーミン一家

トーベ・ヤンソン作・絵 山室 静訳
講談社 1968年（フィンランド 1949）

世界中の子どもの人気者ムーミントロールのお話も、第一作はあまり歓迎されず、ようやく知られはじめたのは、第三作のこの「たのしいムーミン一家」からでした。ムーミントロールと両親、臆病なスニフ、孤独と自由を愛するスナフキン、愛らしいスノークのお嬢さんなど、姿も性格も個性的な仲間たちがムーミントロールを中心にくり広げる不思議で滑稽な出来事の数々。自然にとけこんだムーミン谷での詩情あふれるファンタジーです。ほかに「ムーミン谷の彗星」など全8巻と別巻があります。



タランと角の王

ブリデイン物語1

ロイド・アリグザンダー作 神宮輝夫訳
評論社 1977年（アメリカ 1964）

英雄を夢見る孤児タランは、自分の素性も知らぬまま、賢者ダンバルと元英雄コルのもとで育ち、神託をするという豚の世話をしていました。ある時、とつぜん罫いととびだした豚を追って森に飛び込み、邪悪な角の王に出くわして、そのまま危険に満ちた冒険に踏み出します。正義の旗手ギデオ王子に導かれ、勝ち気な王女、吟遊詩人、奇妙な生き物ガーギなど個性豊かな仲間と旅を続けるうち、自分の重大な役割を自覚するようになります。自分探しの成長物語でもある、神話的長編ファンタジー全5巻の第1巻です。



だれも知らない小さな国 コロボックル物語 1

佐藤さとる作
講談社 1985年

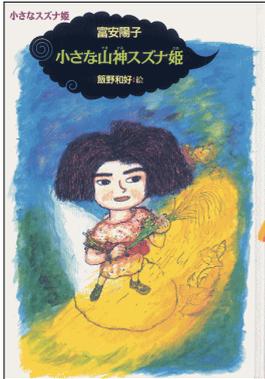
少年の日の「せいたかさん」が、一人の少女や、小指ほどの大きさの小人コロボックルと偶然に出会うことから始まるシリーズの第一作目。すぐそばにいるのに、誰にも知られずにこっそりと隠れて暮らすコロボックル。その静かな小さな国を守ろうと、大人になった「せいたかさん」は彼らとともに力を合わせます。「せいたかさん」とのふれあいを通して、その愉快的生活がいきいきと描かれます。シリーズは別巻を含め全部で6冊あります。



小さい魔女

オトフリート=プロイスラー作 大塚勇三訳
ウィニー=ガイラー画
学習研究社 1965年(ドイツ1957)

127歳でもまだ新米の小さい魔女は、おかしらに「いい魔女」になれば、魔女の祭りに出てもよいと言われます。物言うカラスを相棒に魔法の勉強に励み、魔法を使っていろいろ人助けをします。1年後、魔法の試験は満点なのに「いい魔女」ではないと言われます。それじゃ「いい魔女」ってなんなのでしょう？ここまで小さい魔女に共感して読み進んだ読者は、一緒になって憤慨し、小さい魔女のとった最後の手段に、大喜びすることでしょう。同じ作者の「小さいおばけ」「小さい水の精」も楽しい本です。



小さな山神スズナ姫

富安陽子作 飯野和好絵
偕成社 1996年

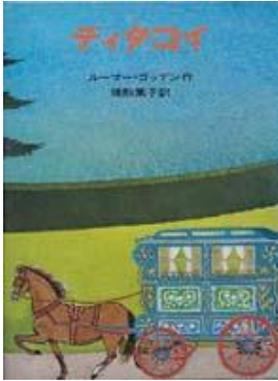
負けん気の強いスズナ姫は山神のひとり娘です。独立してスズナ山を治めたいと夢見ていますが、山神はまだ早いと大反対。一日でスズナ山を紅葉させることを独立の条件とします。スズナ姫は張り切ってスズナ山へ。けれども、家来のモッコウギツネは山神と仲たがいでいるし、虹の光絵の貝を集める壺もありません。困難にも負けず真正面から立ち向かっていくスズナ姫は、独立への期待と喜びにあふれ生きいきとしています。続編の「スズナ沼の大ナマズ」など3冊で、スズナ姫が山神として成長していく様子が楽しめます。



チョコレート工場の秘密

ロアルド・ダール作 田村隆一訳
評論社 1972年 (アメリカ1964)

貧しい家の少年チャーリーは、チョコなどいづも匂いを嗅ぐだけで、めったに食べられません。そんなチャーリーは、工場の中を見学できる券を引き当てました。幸運をつかんだほかの4人の子どもとともに、チョコの川、発明室などを見てまわります。ところが、ほかの子どもはつぎつぎに消えていくのです。最後に残ったチャーリーの身には、何が起こるのでしょう？ 大胆な発想、胸のすく展開、物語の楽しさを存分に味わえます。



ディダコイ

ルーマー・ゴッテン作 猪熊葉子訳
評論社 1975年(作) 1972)

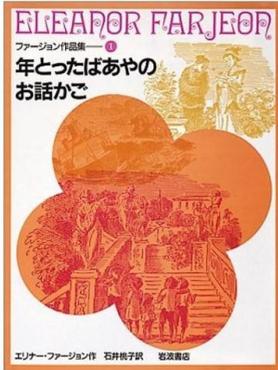
ジブシーの娘キジィはおばあさんと荷馬車に住んでいましたが、おばあさんが亡くなり荷馬車も失って、一人ぼっちになってしまいます。村人や級友の差別といじめに身も心も傷つけられ、殻にこもってしまうキジィ。けれど理解ある人たちの辛抱強い努力でだんだん心を開くようになり、やがて村人たちの気持ちにも変化が…。馬が大好きでジブシーの風習と文化に誇りを持つキジィが、自分の居場所を見つけるまでの希望あふれる物語です。



時計坂の家

高樓方子作 千葉史子絵
リブリオ出版 1992年

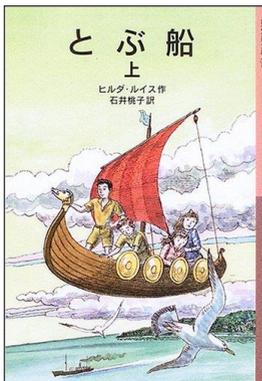
夏休み、時計坂の祖父の家を訪れたフー子は不思議な世界と出会います。突然、階段の踊り場の窓の向こうに緑の園が現れたのです。若い頃亡くなったという祖母と緑の園の謎。フー子は、現実の世界に戻れなくなる不安を抱えながらも園に魅了され、その秘密を探ろうと奥深く入ってしまいます。何かに強く憧れ惹かれる少女の一途さが、美しくも危うい世界への扉を開いたのです。ミステリーとしても独特の雰囲気を持つファンタジーです。



年とったばあやのお話かご ファージョン作品集1

エリナー・ファージョン作 石井桃子訳
岩波書店 1970年(貸 収 1931)

インドの王子やペルシアのお姫さま、それに、エジプトのスフィンクスの乳母までしたことがあるという、とてつもなく年とったばあやは、毎晩、子どもたちの靴下の穴を縫いながら、その穴の大きさに見合ったお話をしてくれます。蝶になった中国の王女、スペインの金の足の娘、古代ギリシアの兄妹の話などそれぞれ舞台も味わいも違う、心にしみる話が13話。絶妙な語り口の、ちょっとレトロでしゃれた独特のファンタジー世界が楽しめます。「イタリアののぞきめがね」「ムギと王さま」と続く「ファージョン作品集」は全部で6巻あります。



とぶ船

ヒルダ・ルイス作 石井桃子訳
岩波書店 1953年(貸 収 1936)

ピーターが不思議な店で手に入れた小さな船は魔法の船でした。乗り手に合わせて大きくなり、願いさえすれば時空を越えてどこにでもつれていってくれるのです。北欧神話の世界で待っている元の持ち主に船を返す時がくるまで、ピーターは3人の弟妹といっしょに、ときどき冒険を楽しみます。スリルに満ちた数々の冒険の中では、古代エジプトの王子や11世紀ノルマンディーの少女との心の交流もあり、歴史への興味もひろげてくれます。



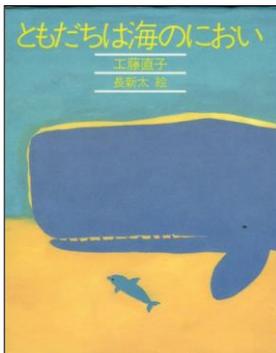
トムは真夜中の庭で

フィリパ・ピアス作 高杉一郎訳

スーザン・アインツィヒ絵

岩波書店 1967年(作 1958)

弟の病気の間、おば夫婦に預けられたトムは、アパートの古い大時計が真夜中に13回時を打つのを聞きます。その時トムが裏庭に出ると、そこは古い時代の美しい庭でした。その庭でトムは一人の少女と親しくなります。ところが、行くたびに少女の年齢も違って、庭園は謎に満ちています。トムはその謎を解こうとします。やがて大人に成長した少女と子どものままのトムは…。上質なタイムファンタジーとして、幅広い支持を受けています。



ともだちは海のおい

工藤直子作 長新太絵

理論社 1984年

イルカとクジラが広い夜の海で出会いました。イルカは体操をするのが好き。クジラはなんと口の奥に書斎を持っています。二人はすっかり意気投合。得意なジャンプを披露したり、詩を朗読したり、毎日がいっそう楽しくなるのでした。ある時、靴をはいて一人パリを旅行したクジラは、遠い海にいるイルカの姿を思い浮かべます。大切な人と過ごすひとときがどんなに心地よいかを知ったのです。所々に挿まれた詩や長新太の挿絵がおおらかです。他に「ともだちは緑のおい」があります。



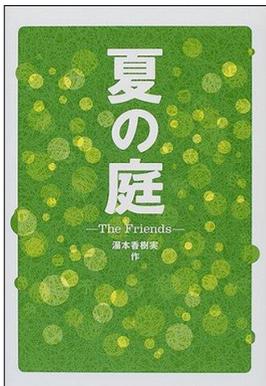
長くつ下のピippi

アストリッド・リンドグレン作

大塚勇三訳 桜井 誠絵

岩波書店 1964年 (対イデソ1945)

町はずれの軒家に女の子がたった一人で引っ越してきました。左右いろいろがいの長くつ下、ぶかぶかの大きなくつ、ピーンとはねた赤毛のおさががみ。それが世界一強い女の子ピippiでした。ピippiはかわいいものなんて何にもありません。馬や牛を軽々と持ち上げたり、おまわりさんやいじめっ子、どろぼう相手に大活躍。ピippiの巻き起こすゆかいな事件にみんなわくわくドキドキ…。世界中の子供たちの人気者ピippiの魅力がいっぱいのとびっきり楽しいお話です。続編に「ピippi船にのる」「ピippi南の島へ」があります。



夏の庭

湯本香樹実作

福武書店 1992年

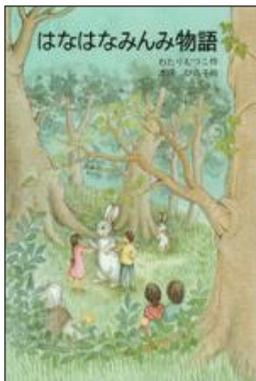
「死んだ人を見てみたい。」そう思った三人の少年は、近所の一人暮らしのおじいさんを見張りはじめます。でも、無気力だったおじいさんは少年たちに気づくと急に生き生きとしてきたのです。そして彼らの年齢をこえた友情が芽生えはじめます。年をとるとどうなるの？ 死ぬってどういうこと？ おじいさんとの交流を通して少年たちは成長し、その答えをみつけていきます。読み終わった後に残る切なさや満足感。心にしみる新鮮な作品です。



のっぼのサラ

パトリシア・マクラクラン作 金原瑞人訳
中村悦子絵
福武書店 1987年(7/11 1985)

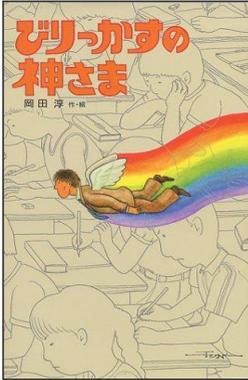
ママを亡くしたアンナとケイレブとパパが住む大草原に、のっぼのサラが海辺の町からやって来ました。子供たちはサラが大好きになりました。でも心の中ではサラが海が恋しくて帰ってしまうのでは？と心配でたまりません。サラは2人の新しいママになってくれるのでしょうか？アンナの目を通して登場人物が生き生きと描かれ、読者の心をあたたかく包み込んでくれます。読み終わった時、満足感にひたることのできる家族の愛の物語です。続編に「草原のサラ」があります。



はなはなみんみ物語

わたりむつこ作 本庄ひさ子絵
リブリオ出版 1980年

はなはなとみんみは小人の双子の兄妹。白ひげじいさんと両親と一緒に暮らしています。ある日、一家は小人大戦争で全滅したはずの仲間が生き残っていることを知り、彼らを探す旅に出発します。しかし、そこには恐ろしい羊人が待ちうけていました。空を飛ぶ小人たちと個性豊かな動物たち。勇気ある、はなはなの活躍や白ひげじいさんの平和への想い。冒険に満ちた楽しい物語の中に込められた作者の熱いメッセージが深い感動を与えてくれます。続編に「ゆらぎの詩の物語」「よみがえる魔法の物語」があります。

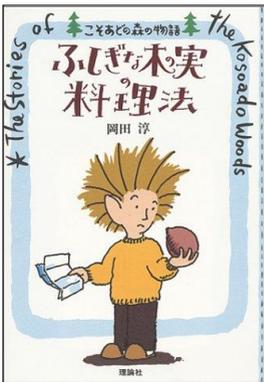


びりっかすの神さま

岡田 淳作・絵

偕成社 1988年

転校生の木下始は、最初の挨拶のときに奇妙なものを見ます。それは小さな男で、背広姿にネクタイ、背中には翼があり教室の中でフワフワと浮かんでいたのです。その後、男はいつもびりっかすの子の前に現れます。始は男に会うためにテストでびりをとることにしました。「びりっかすの神さま」を見た子どもはテレパシーでつながり、友達の輪が広がります。今の競争社会の中で、一番をとることが全てではないと、この本は言っています。



不思議な木の実の料理法

こそあどの森の物語 1

岡田 淳作

理論社 1994年

こそあどの森に住む、読書と空想の好きな少年スキッパーは、博物学者のおばさんが留守中、一人暮らしを楽しんでいました。でもそれは不思議な木の実が届くまででした。手紙が雪にぬれ、料理法を知る人の名が読めないで、仕方なくこそあどの森の住人たちに訊ねて歩きます。ちょっと風変わりなみんなと煮たり焼いたり呪文を唱えたりと色々試していくうちに、スキッパーはそんな毎日が楽しくなっているのに気づくのです。現在「まよなかの魔女の秘密」など、6巻まで出版されています。



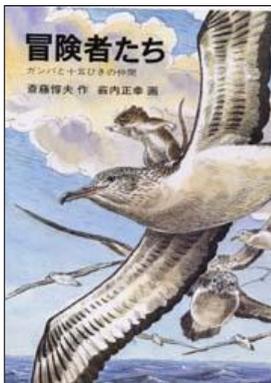
ヘンショーさんへの手紙

B・クリアー作 谷口由美子訳

むかいながまさ画

あかね書房 1984年 (7月) 1983)

少年リー・ボッツは、あこがれの作家、ヘンショーさんに手紙を書きます。作家からの質問や助言に引き出されるように、自分の事を語り始めるリーの手紙は、時に切実で、時にユーモラス。大好きな両親のこと、その両親の離婚や転校先での出来事などが、もてあましぎみの感情を抱える少年の言葉でつづられます。手紙とその後の日記は、「書く」ことの心地よさに目覚めた少年の心の成長記録。切なさは残りますが希望の一編です。続編に「リー・ボッツの日記一走れ、ストライダー」があります。



冒険者たち

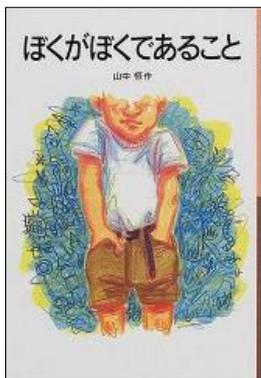
ガンバと15匹の仲間

斎藤淳夫作 藪内正幸画

岩波書店 1990年

〈牧書店 1972年〉

町ネズミのガンバは傷ついた島ネズミに出会い、南の島のネズミたちがイタチ一族に襲われていることを知ります。正義感あふれるガンバが助っ人を募ると、やって来たのはそれぞれ特技を持つ15匹。気弱になっている島ネズミに、不当なものに屈せず闘おうと呼びかけます。イタチの不気味な挑発に命がけの闘いがはじまります。最後まで息つかせぬ、冒険と友情の物語。日本の動物ファンタジーの中ではずばぬけたおもしろさです。



ぼくがぼくであること

山中 恒作

実業之日本社 1969年

〈岩波少年文庫 2001年〉

秀一は、ロウるさい母親と兄弟からいつか離れてやろうと思い、夏休みに家出を考えます。飛び乗ったトラックに運ばれて、着いたところはある農家でした。そこには祖父と二人で暮らしている夏代という少女がいて、家事の全てをこなしていました。秀一は目撃したひき逃げ事件や、埋蔵金にからんだ陰謀にまきこまれたりしながらも、事件を通して成長していきます。冒険物語を楽しみ、そして自分とは何かを考えさせられる本です。



ぼくのお姉さん

丘 修三作 かみやしん絵

偕成社 1986年

きょうだいについての作文を書くという宿題を前に正一は憂鬱です。ダウン症の姉の事にできればふれたくないのです。そんなお姉ちゃんが福祉作業所のわずかな初月給で、家族に夕食をごちそうしてくれました。誰よりも幸せそうな姉は、恥ずかしい存在ではなく、かけがえのない家族と気付く正一でした。表題の「ぼくのお姉さん」を含む6つの短編は、どれも障害者の現実を伝え、彼等をとりまく人々の胸に〈人間〉の生き方を問いかけます。



魔女の宅急便

角野栄子作 林 明子画

福音館書店 1985年

13歳になったキキは、魔女のならわしに従い、相棒の黒猫ジジとひとり立ちの旅にでます。海辺の町コリコで始めた仕事は、ほうきでひととび、どんなものでも、運んでしまおう空飛び宅急便。始めは素っ気なかった人々もユニークな仕事を持ちこむようになりました。どんな注文にも笑顔で応え、町の空を飛び回るキキの姿は、すっかりコリコの風物となります。そして、キキ自身も自分がコリコの町の魔女になったことに気付くのです。同名アニメ映画の原作です。その後のキキに会える続編が2冊あります。



ミオよ わたしのミオ

アストリッド・リンドグレン作

大塚勇三訳 イロン・ヴィークランド絵

岩波書店 1967年(スウェーデン1954)

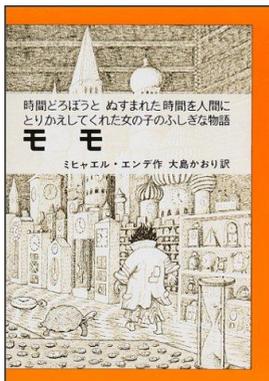
みなしごボッセは養子に行った先で、つらく淋しい日々を送っていました。ある日魔神に連れられて「はるかな国」に行き、立派な王から、お前は王子であると告げられます。あこがれが満たされたミオでしたが、実は、残酷な騎士カトーと戦うことが千年も前から運命づけられていたのです。親友ユムユムと旅に出たミオが恐怖に負けそうになった時、王の声が…。父の愛と信頼を支えに、皆のために勇気を奮い起こすミオの姿が感動的です。



みどりのゆび

モーリス・ドリュオン作 安東次男訳
岩波書店 1977年 (ワズ1957)

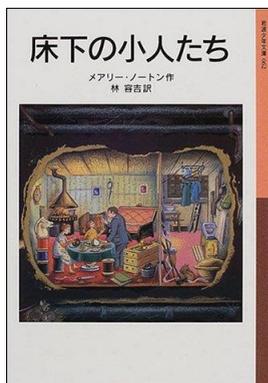
普通の子とは違うから、という理由で学校を追われたチト少年は、庭師のムスターシュおじいさんのもて庭作りの勉強を始めます。その時、自分に「みどりのゆび」があるのを知ったのです。触れるとたちまち花や葉を茂らせることのできる、その不思議な指を使って、さっそくチトは暗い刑務所や病院を花で満たします。そして、戦争が近づいた時、お父さんの大砲工場を花園にかえてしまうのでした。おしゃれな文章と挿し絵が素敵です。



モモ

ミヒャエル・エンデ作 大島かおり訳
岩波書店 1976年

小さな円形劇場の廃墟に住むモモ。誰にでも好かれ、人のやさしい心を引き出してくれる不思議な女の子です。ある日、モモの町に灰色の男たちがあらわれました。彼らは言葉たくみに人々をだまし、時間を盗んでいくのです。モモは友人たちの気持ちがあつたに荒んでいくのが寂しくてたまりません。なんとか、灰色の男たちから時間を取り戻そうとして…。現代人が失ってしまった、人間本来のあたたかさをモモという少女に見ることができます。



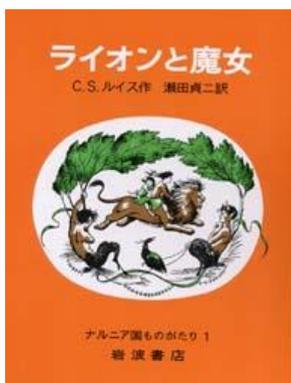
床下の小人たち

メアリー・ノートン作 林 容吉訳

岩波書店 1953年(貸 収 1952)

古い家の床下に小人の親子が住んでいました。人間そっくりで背丈は20センチくらい。生活に必要なものはすべて人間からこっそり借りて暮らしています。安全ピンを物干し竿にしたり、じょうごを煙突にしたりして。人間に見られることがなにより危険なのに、小人の女の子は錠を破って人間と友だちになってしまい…。小人の暮らしが生きいきと描かれていて、なくし物をした時、本当に小人が借りていったのではないかと思うほどです。

「野に出た小人たち」ほか話は続きます。



ライオンと魔女

ナルニア国ものがたり

C・S・ルイス作 瀬田貞二訳

ポーリン・ダイアナ・ハインズ絵

岩波書店 1966年(貸 収 1950)

イギリスの片田舎、老教授の屋敷へ疎開してきた4人の兄妹。ある部屋の衣装だんすを通過して出たところは、もう一つの世界ナルニアでした。そこは白い魔女が支配する永遠の冬。雪を解かして春をもたらすことができるのはライオンのアスランです。兄妹はアスランとともに魔女たちと戦い、平和になったナルニア国で王、女王となってその時代を治めますが…。「ナルニア国ものがたり」全7巻は、国の誕生から崩壊までを描いた壮大で深遠なファンタジーです。各巻はそれぞれの筋で完結しているので1冊づつでも楽しめます。



ルドルフとイッパイアッテナ

斉藤 洋作 杉浦範茂 絵

講談社 1987年

魚屋に追いかけられ、出発間際のトラックに飛び乗った黒猫ルドルフは、遠い見知らぬ町にきてしまいます。そこで出会ったのら猫が「おれの名まえは いっぱいあってな」と話し始めると、ルドルフはそれを名前と思い込み、「イッパイアッテナ」と呼んで、慕い始めます。イッパイアッテナの生き方に、のら猫の知恵や勇気を学び、人間や仲間の猫たちと過ごしているうちに成長していくルドルフ。あつい友情の結末は、猫ながらあっぱれです。続編に「ルドルフ ともだち ひとりだち」があります。

世界の古典名作

二年間の休暇 <ベルヌ>
海底二万海里 <ベルヌ>
あしながおじさん <ウェブスター>
ふしぎの国のアリス <キャロル>
ハイジ <シュペーリ>
ロビンソン・クルーソー <デフォー>
西遊記 <吳承恩>
宝島 <スティーブンソン>
三銃士 <デュマ>
モンテ・クリスト伯 <デュマ>
ジャングル・ブック <キップリング>
秘密の花園 <バーネット>
小公子 <バーネット>
小公女 <バーネット>

若草物語 <オールcott>
ガリヴァー旅行記 <スウィフト>
オズの魔法使い <バウム>
レ・ミゼラブル <ユゴー>
赤毛のアン <モンゴメリー>
青い鳥 <メーテルリンク>
家なき子 <マロ>
ピノッキオのぼうけん <コッローディ>
ピーター・パンとウェンディ <バリー>
トム・ソーヤーの冒険 <トウエイン>
ハックルベリー・フィンの冒険 <トウエイン>
砂の妖精 <ネスビット>
宝さがしの子どもたち <ネスビット>